

「災害のあと 震災のまえ」 その3

當眞嗣朗

災害のあと 震災のまえ

その3

いる自動小銃を指先で指示した。ノボルは喉の奥へと生暖かい唾を押しやつて、不器用に顎を引いた。

姉は弟の耳元に唇を寄せて、言った。ヤツラがなにかを仕掛けてきたら、まず、走って逃げろ、と。このモクマオウの林を抜けたら、海岸沿いに学者の家がある。そこに逃げ込んで助けを求める。そうすれば命だけは助かるだろう。そう言われて、ノボルは現在地から海岸沿いまでの距離を計算した。ゆうに五百メートルはある。その距離を【飴泥棒】の追撃をかわして走るのは難しいな、と感じた。走るだけなら問題はない。しかしここリュックサックの三分の一程度の飴を持ち、重い自動小銃を抱えて、それをこなすのは簡単じゃない。

「とりあえずは俺がヤツラを食い止める。四、五人が一斉に掛かってきても、俺だつたら応戦できる。武術は俺の得意分野だ。でも、お前は逃げるしかない。可能なかぎり守つてやるが、状況次第では無理だろう。だからお前も自衛するしかない。いざ危なくなつたら、それで相手を撃て。躊躇いなく撃ち殺せ」

姉は弟の耳元にそう囁いて、ノボルが肩から提げて

「まずは逃げる。この状況を脱すること。戦闘になるのは次の段階だ」と、姉は言つた。弟の手を引いて、【飴泥棒】から逃れるために、足早に移動をはじめた。なかば走つているような状態だ。モクマオウの林を抜けるには、まだ随分な距離がある。それに辺りは暗く、視界が充分には利かず、そのうえ樹木の太い根が縦横無尽に張つている。躊躇^{つまず}いて転んだらそれで終わりだ。だからこそ【飴泥棒】は、自分たちがここにやつてくるのを待つていたのだろう、とノボルは考えた。ツネコ姉さんは、ノボルに自動小銃の安全装置を解除しておくように、と命じた。

「ヤツラ、この先で待ち伏せしているかもしれないな」ツネコ姉さんが表情を強張らせて言つた。それから彼女はノボルから自動小銃を奪つて、銃口を空へと向けて、一度、放つた。甲高い銃声が辺りに響き渡つた。するとそれまで濃密に漂つていた彼らの気配が消えた。自動小銃に恐れをなして逃げたのだろうか、もしそうだつたら嬉しいな、とノボルは思った。しかし百

戦鍊磨の姉は警戒を解こうとはしなかつた。むしろ彼女の【飴泥棒】にたいする警戒心は強まつた様子だつた。姉はしばらくの間、立ち止まつて、周囲の様子を

じつと窺いつづけた。樹木の枝葉が織り成す深い闇の向こう側に、敵意の濃淡を感じ取ろうとしていた。「まずいな」

彼女は厳しい声音で一言、吐いた。

「ヤツラ、妙に諦めがはやい。なにか魂胆があるぞ」

その時だつた。突然、遠くのモクマオウの影から、ふたりの足元へと向けて、ジユースの空き缶のようなものが投げられるのが見えた。それは地面で跳ねて金属的な音を立て、静かに転がつてきた。それを見て、ツネコ姉さんの顔色が変わつた。

「ガスだ！」

彼女はそう叫んで、ノボルの手を強く引っ張り、その場を脱しようと全力で駆け出した。その瞬間、その空き缶が破裂した。そして強烈な臭いを伴つた煙が急速に広がりはじめた。鼻孔を刺すような刺激があり、目が痛んだ。涙がでてきた。視界が徐々に狭くなり、ついには何も見えなくなつた。

ツネコ姉さんの背中が太い棒のようなもので殴ら

れる音がした。彼女は見えない何者かと対峙しているようだつた。しかし今度は別の方向から次の一打が飛んできた。

「逃げろ、ノボル」

姉の叫び声が聞こえた。ノボルは恐怖に足がすくんでその場を動くことができなかつた。ただガスの強烈な臭気のせいで、息をするのが苦しく、激しい堰をくりかえしていた。視界も利かない。

ノボルは恐怖の只中で確信した。

これは【飴泥棒】じやない！ 彼らのやり方とは違

う。

その時、一発の銃声が轟いた。何者かの放つた弾丸が、ガスの煙の立ち込めるなかで、ツネコ姉さんを襲つている何者かを正確に射抜いたようだつた。

「たいした怪我ではない。大丈夫だ」

学者が穏やかな口振りで言つた。確かに芯を感じさせる声だ。頼りなくもしっかりとした懷中電灯の明かりで、ツネコ姉さんの負傷の度合いを検分している。「背中の打撲はかなりのものだが、骨には異常がないようだ。ただしばらくは猛烈な痛みが残るだろう」辺りには、ガスの臭気がまだ微かに残されていた。

それは目や鼻孔を強く刺激するものの、人体に無害なものだつたらしい。痛みで閉ざされていた視界も徐々に開けてきた。それはヤツラがよく使う手法で、相手を攪乱させる以上の影響はない、と学者が説明した。ドライアイスを濃縮し、少量の酸を加えたものだ、と。ツネコ姉さんは殴られた肩の痛み具合を確かめるようにおおきく右腕をまわし、それが充分に耐えられる程度のものであることを確認したうえで、安堵の息を吐いた。

「ヤツラ、当分のあいだは、戻つて来ないだろう」

彼女は不安な面持ちでこちらを見上げている弟を安心させるように言った。

「何故なら、学者の放った細菌弾をまともにくらつたんだ。被弾したヤツは身体が疫病に冒されて直、死ぬだろうし、仲間も飛沫感染や空気感染によって同様の事態に陥るだろう。当分は体勢を立て直せないだろうからな」

姉が学者と呼んだ男は、落ち着いた所作で、手にしていた自動小銃の安全装置をかけた。金属同士の擦れあう音が、ノボルの内耳にひんやりと染み渡った。銃口からはまだ微かに硝煙の臭いがしている。ノボルは

まだ痛みの残る目をこらして、学者と呼ばれる男の姿を観察した。光源は男の持つ懐中電灯の明かりのみで、モクマオウの林は依然、深い闇で世界を包んでいた。ツネコ姉さんが何者かの襲撃を受けた際に落とした懐中電灯を拾いあげ、スイッチを入れた。暗闇が幾分、和らいだ。男は作業服に似た随分と簡素な服を身につけ、濃い顎鬚あごひげをはやしていた。背は一般的な大人に比べて高い。それでも高身長を誇れるほどではない。無駄な贅肉のない身体だ。痩せているというより、引き締まっているという印象をあたえる。どうやらこの男が、今日、最後の配達先である学者のようだつた。彼は淡々とした口調で言つた。モクマオウの森を抜けた先にある自宅の書斎にいたとき、銃声が轟くのを聞いて、慌てて駆けつけたんだ、と。

「とにかく大事にいたらなくて良かつた」

彼は見た目と相反して青年のように聞こえる声で言つた。懐中電灯の明かりのなかで、厳しいその表情が和らぐのをノボルは見た。その視線はツネコ姉さんへと向けられていた。

モクマオウの枝葉の隙間からまばらに月明かりが洩れている。それは黒い大地に染み付き、無数の橢円

を作っている。それらは白く輝く地上数ミリの浮遊物のよう見える。幻想的な光景でさえある。その只中を三人は寡黙に歩き、林を抜けた。その距離はおよそ三百メートル。そこから先は見渡すほどの海岸線がひろがっていて、白い砂浜が弧を描くような形で地面を構築している。細かな波模様を浮き立たせた暗い海原は、陸地に近付いては離れ、その単調な動きを唯一の手段として世界と対峙していた。ところどころの海面には岩の塊が突き出している。それは太古の昔に墜落した飛行物体のように、海中へと深く潜りこんでいる。木々はそれらの光景を覗き込むように、海と陸地の境目で静かに枝葉を揺らしている。

「わたしの家はこの先だ」

学者は砂浜に突き刺さった巨大な岩の向こう側を、ノボルに指差してみせた。

「それほど大きな家ではないが、夜が明けるまでそこでゆつくりしていけばいい。【餡泥棒】がまた現れないとはかぎらないし、なによりヤツラの仲間が仕返しにやってくる可能性も捨てきれない」

「あの人たちは【餡泥棒】とは違うのですか？」

ノボルは学者に問いかけた。そう言つて、そこに奇妙な違和を感じた。モクマオウの森の暗闇のなかで遭

遇した相手を、自分と同じ人間だと仮定することに抵抗を感じたのだ。それでも彼らを未確認生物とでもいうように考えることは非現実的だとも思われた。一瞬、ガバメントが脳裏に思い浮かび、小首を傾げた後には消えていた。

「アイツラは【餡泥棒】ではない」

学者が厳しい表情で答えた。月明かりの下にはつきりと浮かびあがつたその顔は、細かい皺が無数に寄っていた。声は青年を思わせる。実際の年齢はずいぶん上のだろう。学者は砂浜を行く歩みを止め、遙か彼方の水平線を指差した。

「あの海の向こう側には無数の異国がある。それは判るだろう？　どうやらヤツラは、そのいずれかの異国から海をわたつてここへやつてきたらしいんだ。その正体は判らない。以前、この海岸線に見知らぬ小型船が漂着したことがあって、それ以来、出現するようになった。姿を見せないからその正体を特定することができないし、その小型船も数時間のうちに彼らが解体してどこかに運びさつたんだよ。【餡泥棒】と違うのは確かだ。彼らは群れで狩りをするが、そのやり方はヤツラにくらべれば随分ソフトなものだ。キミたちもさ

つき体験したように、ヤツラはもつと荒っぽいやり方をする。今のところ銃器の使用は確認されていないが、どうやら太い棍棒のようなもので相手を攻撃するようだ。その目的は餉ではない。何故なら【餉売り】以外の人間も被害にあっているからだよ」

そして、これを見てごらん、と学者が傍らの岩肌を指差して言つた。その指の指示する場所にノボルとツ

ネコ姉さんは目を寄せた。そこには青い発光塗料のような染みが束の間の降雨のように残されていた。

「これはヤツラの流した血だよ」

と、学者が言つた。

「血？」

ツネコ姉さんが眉間に皺寄せ、学者の顔を覗き見た。

学者が深刻な事態を語る年長者のように、深くしつかりと顎を引いた。

「人間の血は赤いものだ。しかし同じ地球上には青い色をした血を持つ生き物がいる。カブトガニなどがそうだ。しかしそれらの生き物はあきらかに人類とは異なる姿形をしている。知性も劣っている。我々人類は、

科学技術の発展によつて未知の領域をすいぶん切り開いてきた。この地球上に秘境は消失し、多くの未確

認生物がその姿を特定してきた。しかし今だに新種の発見が後を絶たない。ということは、我々人類が目にしたことのない生き物が、まだこの世界には存在するということだよ。ひょっとしたらそれは人類と似た姿形をしているかもしれない。なにしろ我々はガバメントの正体さえ掴めていないのだからね」

「災害発生時の拡散した放射性物質が生命になんらかの影響を及ぼしたと考えることはできないか？」

ツネコ姉さんが慎重な聲音で言つた。災害の後、身体に異常をともなつた子供の出産が相次いだのは紛れもない事実だった。その当時、政府は放射能が人体に与える影響はかなり低いとし、専門の学者や経済人などは、放射能で死んだ人間はいまのところ出ていないと断言した。それによつて人心を安定させ、原子力エネルギーの恒常的な利用を図ろうとしたのだ。しかし災害が発生し、問題が表面化した後、その論理がまったくのデータラメであることを多くの人間が知ったのだ。

「それは判らない

学者は言つて、かぶりを振つた。

「ただ、ヤツラは造船技術を持つ。それは知性の高さ

を証明するものだ。それにはどうやらヤツラにだけ通じる言語を持つてゐるようだ。先ほどもヤツラは互いに

小声で指示を出し合っていたようだよ。それはガバメントの使う言葉とも違う。ということは、ヤツラは人類とはすこし異なるが、同程度の知性を持った未確認生命体であるという仮定が成り立つ。もちろんそれが我々の持つ疑問や不安を氷解させるものではないが

が

学者の家は海岸に横たわる巨大な岩の傍らにあつた。まるでその岩を風防として利用しているような感じだ。三角の屋根を持つ木造のその家は、^{きまく}気紛れな誰かがそこに置いてきたというような趣で存在していた。土台を固めるような基礎工事がおこなわれてなく、大きなトレーラーで牽引して別の場所に移動させることができそうだった。簡素に作られた小屋といった感じだ。中に入ると至る所に書物の山があり、その数ぐ量だった。それらは難解なタイトルを持ち、子供の理解を拒んでいるように見えた。それでもノボルは読書の誘惑にかられた。

「ここは本ばかりでヒトの居場所がすくない。居間

にはまだ余裕がある」

学者はそう言つて、ふたりを家の奥へと案内した。

そこもやはり本で満たされたが、からうじて数名の人間が横になるスペースがあつた。まるでその空間を本の侵略から防いだような感じだ。どうやら学者は一日の大半をここで過ごすらしい。生活に必要なものが一通り揃つていて、隣のキッチンへのアクセスも容易だ。

「驚いたか？」

ツネコ姉さんがノボルに向かつて笑みを投げかけ

て言つた。

「ここは姉さんが若い時代を過ごした家なんだよ」

書物だらけの居間は古書特有の匂いがした。ノボルにとつて、それは心地よいもので、出来ればいつまでもその匂いに包まれていたかった。世界中の知性を集めたら、こんな匂いがするのかもしれない。ノボルはそう考えて、傍らのソファに座る姉を見た。彼女は、若い一時期をここで過ごしたという。学者とツネコ姉さんがどのような関係だったのか、ノボルは知らない。彼女もそれを詳しく語ろうとはしない。しかし二人の様子を見て、それを想像することはできる。二人は一

定の距離を保つてはいるものの、親密な雰囲気を感じさせていた。

「北のほうでは、たくさんの瓦礫が海岸に流れ着いた」という

学者が硬い表情を顔面に浮かべて言つた。彼はスプリングの固くなつた古い革張りのソファに座つて、背もたれに身体を預け、自分で調理したというシチューをスプーンでクチに運んだ。乳製品が不足した現在、調味料として主に人工ミルクが使用された。彼はその味に納得がいかない様子だつた。これには栄養がない、と彼は言つた。ノボルやツネコ姉さんはテーブルを挟んだ向かい側のソファに座り、薦められて、同じように食事をした。確かに美味しいシチューとは言えなかつた。

「瓦礫とは、災害で発生した瓦礫のことか?」

と、姉が訊いた。

学者が無表情のまま深く頬を引いた。

「わたしもね、人づてにその話を聞いたのだよ。詳しいことはまだ判らないんだが、どうやらあの災害の被害にあつたのは、日本だけじゃないようだ。海の向こう側のいずれかの国でも相当な被害が出たのだろう

な。今となつては確認のしようがないが。その瓦礫は、みつつの集落を呑み込むほどの量だという。そしてこれがやつかいことなんだが、毒がふくまれているらしいんだ。高濃度の放射性物質が検出されたらしい。その集落は、それをなるべく安全に処理しようとしているんだが、こういう世の中になつては、それは無理だ。広域処理をしようとしても、どの自治体も受け入れを困難視している。そもそも、その広域処理事態に、疑問がもたれているし、自治体の機能そのものが麻痺している状態にある。なにしろ今の日本を、非公式にせよ、統治しているのはガバメントだからね」

学者が事態の深刻さを感じさせる深いため息を吐いた。その表情は暗く、顔中の筋肉が凍り付いているように見えた。

「彼は何故、あの災害が起きたのかを確かめようとしているんだ」

ツネコ姉さんがノボルに説明した。

「原因をはつきりさせれば、またそれが生じるのを防げるかもしれないだろう。それに、多くの人間が、その疑問を解明したいと願つていてる」

学者は、ほとんど手付かずの皿をテーブルの上に戻

した。プラスチックの軽い音がした。

「瓦礫というのはね、瓦礫と呼ばれるようになる前は、日用品だったりするんだよ。つまり日常生活に溢れている様々な物資のことだ。それが津波に押し流されて

堆積すれば、瓦礫と呼ばれるようになる。我々は、つねに瓦礫の山に囲まれて暮らしているようなものだね。それを善としてきたのが資本主義であり、その時代を謳歌してきたのが人類だ。でも、今となつては不思議だね。瓦礫に囲まれて暮らし、それを不思議とも思つていなかつたなんて」

「学者は、この先、世界はどうなつていくと思う？」

ツネコ姉さんが訊いた。ノボルは彼女が彼のことを「学者」と呼ぶことが不思議だった。彼には名前がないのだろうか？

「よく判らないな」と、学者は答えた。

「沖縄は比較的安定しているけれど、日本は、もう放射能の汚染にさらされているから、人間が安心して住めるような環境じゃない。かと言つて、すべての日本人が土地を捨てられるわけじゃない。だから飴が売れるようになつた。この先、世界がどうなるかなんてよく判らないけれど、豊かな生活を謳歌できる時代が終

わつたのは確かだね。これから世界は縮小せざるをえないんじやないかな。原始時代のようにはならないとしても、物質主義の時代は終わったね」

ノボルはそれらの話が自分の脳裏で具体的なイメージを結ばないのを感じた。日本には、大量の瓦礫が流れ着いたという。その瓦礫の山のなかで、人々はどのように生きているのだろうか？ いくら飴を舐めているからといって、息苦しいのではないだろうか？ そして、汚染された大地に住むということは、希望がない、ということなんじやないだろうか？ だから飴が売れるのだけど、その甘さで現実の厳しさを忘れても、それは決してなくならないものだ。

「ねえ、ガクシャさん」

ノボルは言った。

「ぼくはおおきくなつたら、汚染された世界を見に行きたいと思うんだ。そこで飴が大量に売れるのなら、ぼくは大金持ちになれるんじやないかな」

「なるほど」と、学者が頷いた。

「確かに、飴におおきな需要があり、貨幣経済が生きている今日では、それは可能だろうね。だからキミは莫大な金を手に入れることができるだろう。でも、飴

が人々の忘却に手を貸していることを忘れてはいけないよ』

つづく